

## 石川の巨樹「巨樹の在りか」

私は巨樹に魅せられ、県内はもとより国内外の巨樹や巨木林をたくさん見てきた。

このような経験から巨樹の在りかにもいろいろあり、特に外国で出会った巨樹には興味を惹かれた。以下、県内と国外から例を挙げ二〜三思いつきを出を記したいと思う。

古いデータだが、県内では「石川県巨樹の会」が二〇〇八年に発行した「石川の巨樹・巨木林」を基に、石川の巨樹・巨木林の所有区分別の本数を調べ、簡単にまとめたのが次の表である。

神社	寺院	公共	個人	計
1400本	316本	313本	327本	2356本
60%	13%	13%	14%	割合

(備考)  
 公共・岡有林・県有林  
 学校・公園  
 個人・私有林・屋敷林  
 など

この表から解るように、県内の巨樹巨木林の約七十パーセントが、神社やお寺にある。神社には社叢林も含まれており、大部分の神社やお寺では氏子・門徒宗の協力で成立している。台風や降雪で建物に被害が出た場合、そ

の修理費は自分たちで賄うことになっており、実際被害が生じた場合、被害を起した樹以外の巨木もその修理費のために伐られることがある。鎮守の森のようにやや極相に近い県内の森では、スタジイやタブノキが多いが、歴史が浅いかまたは一度成木が伐られた神社では、利用価値の高いスギやケヤキの樹が多いようだ。また、第二次大戦中か戦後だったか、自然に近い社叢林の半分余を伐採し、スギの植林をしたと云う話も聞いたことがある。

私の小さい頃よく見かけた鎮守の森は市や町の外れにあったが、今は住宅地に飲み込まれ、森の周辺に舗装道路ができ、住宅が立ち並んでいる。このような例はままあり、私たちが調査で伺うと、宮司さんはそのためか樹の先端枯れが目立ち、周りの住宅からも風が吹くと枝葉が屋根に落ちるなどの苦情が多く困っている。それで強剪定をしたのだと。これも新しく移り住んだ人達にはなじみが薄いかもかもしれないので、理解していただく努力をしなければと笑っていたのを思い出す。

屋敷林やお寺の境内にある樹も例外ではない。台風などくると夜もおちおち眠れないとのこと。勢いよく

枝を伸ばしていたイチヨウが見事なほどに強剪定がなされ、伐ろうと思っているがかなりの費用がかかることで躊躇しているとの話も聞いた。以上、先行き暗い話になったが、これも時代の流れで致し方なかったとも思うが、数百年にわたって生き続けてきた樹に一種の樹霊を感じるならば、一時の思いでないがしろにすることはどうかとも思っている。

我々巨樹の会では金では解決できないと思うが、一本でも多くの巨樹を後世に残すため、巨樹を長生きさせる相談や巨樹の大切さを知ってもらうための活動をさらに積極的にするべきと思っている。

次に、最初にふれた外国での巨樹の在りかはどうか、ヨーロッパの二、三の国で見た例を挙げてみたい。これらの国では自然の森は殆どないとのこと、林らしきものはあるがいずれも建築材料や家具として紙の原料になる樹の植林地が殆どである。南ドイツの畑地では小麦・ブドウ・ホップの栽培が主で、他の起伏のある平地は殆ど牧草地である。そこに適当な間隔で樹が植えられており、枝を広げた姿は森のように見える。ドイツに巨樹の定義はないと聞いたが、明らかに日本の巨樹定義を上回る大きさだ。これは、夏の暑い日に牧畜と牧草の休憩のため残されたきたのだと言う。



コルクガシの古木



オリーブの古木

(石川県巨樹の会 濱野一郎)

また、集落の広場や四つ辻の真ん中にはナツボダイジュやフユボダイジュの巨木がある集落が多く、昔は、村人の集会場であり時には木の下で裁判が行われていたとも云う。アメリカの西部劇で見たシーンを思い出し興味を持てた。

スペインやポルトガルでは、土地の特産品であるオリーブやコルクガシの古木(巨樹)が、広々とした畑地の片隅に残されており、農場主により大切に保護されていることが解った。先祖代々が世話になった樹が、こうした形で大切に残されているのに接し感銘を受けた。上の写真はオリーブとコルクガシの古木である。いずれも幹周五百cm以上ある。